

海の底から、  
さようなら

古川大輔



海の底。

岩とゆらゆら揺れる海藻。

その周りに、壊れ朽ち果てた机やタンスなどの家具が散乱している。

また、皿やコップなどの日用品から車のタイヤなども転がっている。

そんな中、ボロボロのスーツを着た男が一人、古びた椅子に座り手紙を書いている。

漂う一匹の魚。

男の様子をじっと見ているようだ。

男、手紙を書き終えると折りたたんで椅子の上に置き、その上に傍らの小石を乗せる。

そして、水の中をふわふわと歩き出す。

汚れた大きな鞆を拾って来る。

すると、とても使えそうもない洋服や下着、日用品を鞆に詰め込む。

鞆を閉じる。

そして、落ちているコップを拾う。

少し奥に行き、落ちているやかんを拾う。

やかんを傾けて、コップに注ぐ。いや、注ぐマネをする。  
遠くを見つめながら飲む。いや、飲むマネをする。

魚 おい。

男 ……

魚 先生。

男 (魚を見る)

魚 コーヒーか？

男 (うなづく)

男、またコーヒーを飲むマネをする。

魚 うまいか？

男 (首を傾げる)

魚 なに書いてたんだ？

男 手紙。

魚 だれに？

男 子供たち。

男、コップを置くと傍に落ちているカサを拾い上げる。

魚 行くのか？

男 ああ。

魚 急ぐのか？

男 いや。

魚 もう少しいられないのか？

男 どうして？

魚 寂しいだろ。

男 魚が？

魚 は、寂しがつちゃダメか？

男 ……

魚 どこに行くんだ？

男 さあ。

魚 さあって？

男 わからない。海でも陸でもないところ。

魚 どこだよ？

男 知らないよ。はじめてだからな。

魚 行きたいのか？

男 いや。

魚 行きたくないならここにいろよ。

男 そうもいかない。